

野菜共通 ヨトウガについて

1 生態

ヨトウガ（ヨトウムシ）はマメ科作物、野菜、花卉、果樹、たばこ等広範な作物を加害するが、特に問題となるのはハウレンソウ、アブラナ科、マメ科等である。作物の葉部分のみでなく、花やつぼみなども加害するため大きな被害をもたらす。成虫の前翅長は22～24 mm、前翅は暗灰褐色で、黒紋や茶褐色斑などが混じるまだら模様である。蛹は茶褐色で体長約20 mmである。若齢幼虫は淡緑色で、成長すると淡褐色や灰黄色など変異がある。成熟幼虫は黒みを帯びることが多く頭部および胸脚は茶褐色で、体長は約40 mmにもなる。本虫の成熟幼虫は夜に作物を食害する（夜盗）が、それより若い幼虫は日陰や曇天時の日中であれば活動する。卵は約0.6 mmのやや平たい球形である。

本虫の雌成虫がほ場内に飛来して作物の葉上等に数十～数百個の卵塊を産む。ふ化した幼虫は3齢期頃まで集団で生活するが、中齢期以降は分散して活動することが多い。齢数が重なるにつれ、摂食量も増えて大きな被害を与える。幼虫はふ化からおよそ一カ月後に6齢となって土中で蛹化する。蛹は夏眠などを経たのちに羽化する。本虫は地下5 cmに土窩を作り蛹で越冬するため、自然状態での凍結死は少ないとされており、寒冷地で被害が多い。



図1 成虫（体長約27mm）

2 発生状況

成虫の基本的な発生は、春（4～6月頃）と秋（9～11月頃）の年2回である。本虫は土中で越冬し、高冷地でも4月末から発生する。成虫の発生は標高が低い地域ほど多い傾向がある。飛騨地域における成虫の発生のピークは、春は5月、秋は9月を中心として、夏休眠の期間を挟んで年間2回あるが、休眠しない個体があるため盛夏にも発生する。

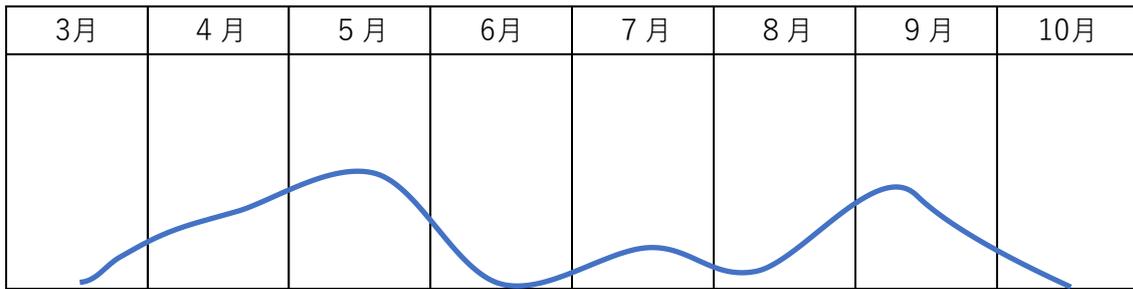


図2 ヨトウガ発生消長（飛驒地域）

3 防除対策

(1) 育苗期

本虫は前年多発ほ場付近での越冬や、飛来があるため、育苗ハウスには侵入防止効果がある4mm以下の目合の防虫ネットを使用する。また育苗鉢には効果が長い粒剤を施用し、育苗時の寄生を防ぐ。

(2) 本ぼ

本虫の防除については、施設栽培では4mm目合の防虫ネットが物理的防除法として効果的である。また露地栽培では初期防除として、粒剤の使用が効果的である。本種は卵塊で産卵し、若齢幼虫は集団で生活することが多いので、幼虫の発生初期が散布剤による防除適期とされる。

(3) 秋耕

かつて本虫は寒冷地で大発生し、大きな被害を及ぼしていた。しかし秋耕により、蛹がいる土窩を壊すことによって冬率が低下し、発生が少なくなったと考えられている。飛驒地域においても、耕作放棄地の耕地化等により防虫ネットの内部となるほ場内において本虫の発生が懸念される場合は、秋耕は有効であると考えられる。